

わたくし、つまりNobody賞

—— 受賞者一覧 ——



池田晶子

2007年 第0回（創設）

【略歴】

1960年(昭和35年)8月21日午後9時5分、東京の一隅に生を得る。1983年(昭和58年)3月、慶應義塾大学文学部哲学科倫理学専攻を卒業。文筆家と自称する。池田某とも。

専門用語による「哲学」から哲学を解放する一方で、驚き、そして知りたいと欲してただひたすら考える、その無私の精神の軌跡をできるだけ正確に表わすこと——すなわち、考えるとはどういうことであるかを、そこに現われてくる果てしない自由の味わいととも、日常の言葉で美しく語る「哲学エッセイ」を確立し、多くの読者を得る。とくに若い人々に、思い込みを捨てて本質を考えることの面白さと形而上の切実さを、存在の謎としての生死の大切を、語り続ける。

新宿御苑と神宮外苑の四季風景を執筆の伴とし、富士山麓の季節の巡りの中に憩いを得て遊ぶ。山を好み、先哲とコリー犬、そして美酒佳者を生涯の友とする。

2007年(平成19年)2月23日午後9時30分、大風の止まない東京に、癌により没す(46年6ヶ月)。著作多数。さいごまで原稿用紙とボールペンを手放すことなし。いながらにして宇宙旅行。出発にあたり、自らたって銘を記す。「さて死んだのは誰なのか」

その業績と意思を記念し、精神のリレーに捧ぐ「わたくし、つまりNobody賞」が創設された。

注記）絵本作家の池田あきこ氏、アニメーターの池田晶子(しょうこ)氏、女優・モデルの池田晶子（昌子、しょうこ）氏の各氏は、文筆家・池田晶子とは別人です。

【創設理由】

この風変わりな賞の創設と名前は、2007年春にこの世を去った、文筆家・池田晶子とその一作品名「わたくし、つまりNobody」に由来します。

彼女は、いつも次のような考え方を示唆しています。

考えているその時の精神は、誰のものでもなくNobody。

言葉は誰のものでもないけれども、それが表現されるためには、誰かの肉体を借りるしかない、そうして現われてくる言葉こそが、人の心を捉え、伝わってゆく……。

大事なものは「誰が」ではなく、誰かによって発せられた「言葉」が、次の時代の人々に引き受けられて、我々の「精神のリレー」が連綿と続いてゆくことである、と。

この賞は、自身もそのように仕事を続けたひとりの文筆家の発想に始まっています。ひたすら考え、それを言葉で表わし、新たな表現形式を獲得しようとする次代の言葉の担い手に向けて、「(池田晶子記念)わたくし、つまりNobody賞」を、ここに創設します。

わたくし、つまりNobody賞

—— 受賞者一覧 ——



川上未映子

2008年 第1回受賞者

【略歴】

作家。1976年8月29日、大阪府生まれ。2007年、デビュー小説『わたくし率イン歯一、または世界』が第137回芥川賞候補に。同年、第1回早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞受賞。2008年、『乳と卵』で第138回芥川賞を受賞。2009年、詩集『先端で、さすわさされるわそええわ』で第14回中原中也賞受賞。2010年、『ヘヴン』で平成21年度芸術選奨文部科学大臣新人賞、第20回紫式部文学賞受賞。2013年、詩集『水瓶』で第43回高見順賞を受賞。他の著書に長編小説『すべて真夜中の恋人たち』、エッセイ『ぜんぶの後に残るもの』『魔法飛行』『人生が用意するもの』などがある。2013年3月、著者にとって初めての短編集『愛の夢とか』を刊行予定。2008年3月、第1回(池田晶子記念)わたくし、つまりNobody賞を受賞。

【授賞理由】

「象の目を焼いても焼いても」「わたくし率イン歯一、または世界」「乳と卵」「告白室の保存」などの作品における思索する文章のあり方は、「わたくし、つまり Nobody 賞」の趣旨にかなうものです。その言語表現の姿勢を顕彰し、併せて今後の同氏の可能性に対し当賞を贈ります。



大竹伸朗

2009年 第2回受賞者

【略歴】

画家。1955年、東京都生まれ。高校卒業後、北海道別海町の牧場に住み込みで働く。77年から78年にかけてロンドン滞在。80年、武蔵野美術大学油絵学科卒業。82年、初個展を開催、以来、国内外で精力的に活躍する。2006年、東京都現代美術館にて「大竹伸朗 全景1955-2006」展開催。2012年、ドクメンタ参加(唯一の日本人作家)。同年、ソウル・アートソンジェ個展。2013年春より、香川県女木島で廃校を作った大規模インスタレーション開始(長期プロジェクト)同年、夏より、MIMOCA丸亀市猪熊弦一郎現代美術館で大規模個展、愛知県のINAXライブミュージアムで陶器展。たえず新しい価値観を提示し、美術界の閉塞状況と闘い続ける姿勢は、アート・シーンを超えて幅広く熱い支持を得ている。2009年、第2回(池田晶子記念)わたくし、つまりNobody賞を受賞。

【授賞理由】

単行本『見えない音、聴こえない絵』、また月刊誌「新潮」における同タイトルの連載を通じ、「言葉、あらゆる事象」に対して常に鋭敏であること、さまざまな疑問を投げかけそれを突き詰めていこうとする姿勢を、高く評価します。「新たな表現形式を獲得しようとする人間の営みに至上の価値を置く」という、本賞の趣旨にふさわしい人物と考え、また今後の更なる意欲的活動に期待し、当賞を贈ります。



古処誠二

2010年 第3回受賞者

【略歴】

作家。1970年、福岡県生まれ。2000年、『UNKNOWN』でメフィスト賞を受賞し、デビュー。ストイックで寡黙な語り口のなかに、人間の業を描き出し、新世代の戦争文学を担う。著書に『アンフィニッシュト』『ルール』『七月七日』『分岐点』『接近』『遮断』『敵影』『メフェナーボウンのつどう道』『線』『ふたつの枷』『ニンジアンエ』『死んでも負けない』など。一作一作を仕上げてのち、次の仕事にとりかかるという地道なスタイルを堅持している。2010年、第3回(池田晶子記念)わたくし、つまりNobody賞を受賞。2017年には、『いくさの底』で第71回毎日出版文化賞を受賞。

【授賞理由】

最近作『線』をはじめ、氏の作品に共通するのは、戦場の、それも敗走という極めて困難な状況に追い込まれた人間たちの有り様です。歴史に名を残すことなく死んでゆく一人一人の姿がひたすらに考えられ、冷静に描写されています。資料精査の果てに、従来の戦記文学を超越し、戦争体験者には書けない物語の領域を切り開かれたことは、まことに当賞の趣旨にふさわしいものです。戦争と人間の真実を伝える文学の担い手として今後一層の活躍を願い、当賞を贈ります。

わたくし、つまりNobody賞

—— 受賞者一覧 ——



杉原美津子

2010年 特別賞

【略歴】

編集者・作家。1944年、愛媛県生まれ。1980年に起きた新宿西口バス放火事件に遭遇、この体験を機に執筆を始める。著書に『生きてみたい、もう一度』『炎のなかの絆』『老いたる父と』『命響きあうときへ』『他人同士で暮らす老後』『絆をもとめて』『夫、莊六の最期を支えて』など。

2009年10月、「逝く時を支えられて」を脱稿、応募。2010年、「〔池田晶子記念〕わたくし、つまりNobody賞」の特別賞を受賞。同作を増補改稿した『ふたたび、生きて、愛して、考えたこと』が同年4月に刊行される。

2014年12月7日没（70歳）。

【授賞理由】

肝臓癌と診断され、切迫した状況にあると告げられた氏は、当賞に応募された作品「逝く時を支えられて」で自身の半生と来たるべき死を見つめ、私とは何かを問い続けます。

新たな表現形式の可能性を見出そうとする賞の趣旨には必ずしも該当しませんが、どこまでも表現し続けようとする氏の姿勢に、私たちは深い共感と敬意を表します。このような高い水準の投稿を得た喜びを著者と分かち合うとともに、ここに特別賞をもって、氏の営為を顕彰するものです。



大澤信亮

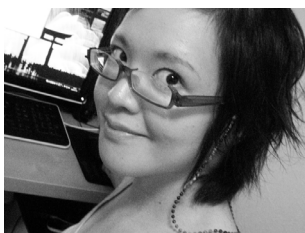
2011年 第4回受賞者

【略歴】

1976年東京都生まれ。文芸批評家。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。2007年「宮澤賢治の暴力」で第39回新潮新人賞（評論部門）受賞。著書に『神的批評』（新潮社）。2011年、第4回「〔池田晶子記念〕わたくし、つまりNobody賞」を受賞。

【授賞理由】

例えば宮澤賢治への問いを自身への問いとして対峙し、問うことの果てに失語の中から言葉を見出そうとする愚直なまでの考える精神。収まりのよい解釈に止まることなく、半ば暴力的に問い続け、創作の域へも踏み込んでいく北大路魯山人論。初の単著となる『神的批評』でも示された、社会や現実の事象の先に批評そのものを生きてゆこうとする氏の姿勢とその表現は、本賞の趣旨にふさわしいものです。時代の壁を突破し、精神の新たな闘争領域を切り拓く言葉の担い手として、これからの氏の大胆な挑戦と活躍に期待し、当賞を贈ります。



大野更紗

2012年 第5回受賞者

【略歴】

1984年福島県生まれ。上智大学外国語学部フランス語学科在学中から、ビルマの民主化、難民問題を研究。同大学大学院に進学した08年、自己免疫疾患系の難病を発症。ほとんど症例がなく、診断がつくまでに1年以上かかる。その後、9ヶ月の壮絶な入院生活を経て、現在は自宅で在宅闘病の傍ら執筆中。発症から退院までの2年近くの記録を出版社のホームページに掲載する。その連載をまとめた初めての著書『困ってるひと』が11年6月に刊行される。2012年3月、第5回「〔池田晶子記念〕わたくし、つまりNobody賞」を受賞。

【授賞理由】

他国の難民を助けるつもりだった若き著者は、ある日、難病という自らの身体の反乱に遭遇し、他人事でなく本物の難民になっていた。その状況を、自らをフィールドワークの対象としてユーモアを込めて描くことで、われわれが置かれている不条理な現実を多くの読者に気付かせた。「わたし」を語りながら個人的な闘病記の枠を遥かに越え、人間存在についての普遍的な問いに触れてゆく著者の視点は、「わたくし、つまりNobody」の精神にふさわしいものです。言葉の力を信じ、伝え続けようという大野さんの今後の活躍に期待を込めて、当賞を贈ります。

わたくし、つまりNobody賞

—— 受賞者一覧 ——



宮内悠介

2013年 第6回受賞者

【略歴】

1979年、東京都生まれ。作家。92年までニューヨーク在住、早稲田大学第一文学部卒。在学中はワセダミステリクラブに所属。2010年、デビュー作となった囲碁を題材とする『盤上の夜』を第1回創元SF短編賞に投じ、受賞は逸すも選考委員特別賞である山田正紀賞を得る。同作を表題とする『盤上の夜』が、第一作品集ながら第147回直木賞候補・第33回日本SF大賞となった。2013年3月、第6回「(池田晶子記念) わたくし、つまりNobody賞」を受賞。2017年には、第38回吉川英治文学新人賞と第30回三島由紀夫賞を受賞している。

【授賞理由】

囲碁やチェッカー、麻雀、チャトランガ(将棋やチェスの原型)、将棋など、盤上遊戯における極限状況を言語作品に創出することで作者は何を企んだのか。そこにあるのはゲームのルールのみ、対戦者はその言語ゲームの中に命懸けの対話を試みているかのようだ。勝負を語らずに勝負の本質を、心理を描写せずに心理の本質を、自分が今ここに在ることの不思議と畏怖を、盤の奥底にひそむ闇から、物語の主人公とともに、飛び交う刃物のような言葉で読者に問いかけてくる。氏が、よほど純粋に言葉の力を信じているからこそ可能となった思索的冒険の成果であり、新しい表現者を迎えた喜びを籠めて、当賞を贈ります。



宇田智子

2014年 第7回受賞者

【略歴】

1980年、神奈川県生まれ。2002年にジュンク堂書店に入社し、池袋本店で人文書を担当する。2009年、那覇店開店に伴い沖縄に異動。2011年7月に退職し、同年11月11日、那覇市の第一牧志公設市場の向かいに「市場の古本屋ウララ」を開店する。著書に『那覇の市場で古本屋 ひょっこり始めたくウララ』の日々』(2013年7月・ボーダーインク刊)がある。2014年3月、第7回「(池田晶子記念) わたくし、つまりNobody賞」を受賞。

【授賞理由】

気がついたら公設市場の向かいで三坪ばかりの古本屋の店主になっていた、と語る著者は、その体験を身近雑記ふうな語りで活写してみせる。しかしそこには、自分にとって生きている、暮らしているとはどういうことか、自分と他者、その間をつなぐ本の存在とは何であるのか、それらを見つめ、言葉にしてゆこうとする著者の姿が表わされていた。自分の息づかいと同じリズムで考え、ことさら無理をせず、あえて修辭を抑えた文章に、身ひとつで世界全体を見晴かし、対峙してゆこうとする表現者としての氏の覚悟と可能性をわれわれは見た。今後の活躍を期して当賞を贈りたい。



©Takafumi Okuda

ヨシタケシンスケ

2015年 第8回受賞者

【略歴】

1973年神奈川県生まれ。筑波大学芸術研究科総合造形コース修了。日常のさりげないひとコマを独特の角度で切り取ったスケッチ集や児童書の挿絵、挿画、イラストエッセイなど多岐にわたり作品を発表している。初の絵本作品となる『りんごかもしれない』(2013年4月・ブロンズ新社刊)で数々の賞を受賞。絵本第2作となる『ぼくのニセモノをつくるには』(2014年9月・同社刊)も高い評価を得る。「発想絵本」と称されるこれらの絵本作品以外にも、『結局できずじまい』『せまいぞドキドキ』(講談社刊)、『そのうちプラン』(遊タイム出版刊)、『しかもフタが無い』(PARCO出版刊)などの著書がある。2児の父。2015年3月、第8回「(池田晶子記念) わたくし、つまりNobody賞」を受賞。2017年には、『もうぬげない』でポーロニャ国際児童図書賞(フィクション部門)を受賞。

【授賞理由】

氏は、日常のある一点にこだわり、とことん突き詰めていく、というスタイルのイラスト&エッセイを多く書(描)いてきたが、近著『りんごかもしれない』では、ある物が本当にそうであるのかという点を、『ぼくのニセモノをつくるには』では、人間とは何であるのか、という探究を行なっている。絵本を通してこのような試みをするという点に独自性があり、それが新ジャンルとも言える「発想絵本」へと見事に結実した。この「発想絵本」の展開を更に延ばしていくと、果たしてどういうものが見えてくるのか、読者にどういう地平が広がっていくのか、そこに新たな表現形式の誕生が予感される。今後の活躍を期して当賞を贈りたい。

わたくし、つまりNobody賞

—— 受賞者一覧 ——



©Tomofumi Usa

武田砂鉄

2016年 第9回受賞者

【略歴】

1982年生まれ。ライター。東京都出身。大学卒業後、出版社で主に時事問題・ノンフィクション本の編集に携わり、2014年秋よりフリーとなる。多くの雑誌、ウェブ媒体に寄稿。インタビュー・書籍構成も手掛ける。著書に『紋切型社会——言葉で固まる現代を解きほぐす』（朝日出版社、2015年、第25回Bunkamuraドゥマゴ文学賞受賞）などがある。（写真撮影・宇佐巴史）

【授賞理由】

耳あたりの良いキャッチフレーズは、時に人を否応なく排除し、時に人を暴力的に黙らせる。氏が『紋切型社会』で問うたのは、こん日の社会を覆う、この言葉の負の力です。この力にいかんして抗うことができるのか。ただ安易に切り返し、言い返すだけでは、自らもまた紋切型に堕ちてしまいかねません。その点を強く意識し、排除され隠蔽されたものを一つ一つ丁寧に取り出す氏の手つきには、言葉の本来の力への限らない信頼が感じられます。言葉を疑い、言葉を信じる。言葉の暴力に、不断に言葉で抗いつづける。氏の活動の根幹にあるこの姿勢にこそ、新しい表現は拓けるものと信じ、当賞を贈り、さらなる闘いへと進まれんことを願います。



栗原康

2017年 第10回受賞者

【略歴】

1979年、埼玉県生まれ。大学院修了後、ニート、ときどきフリーター。現在は、週にいちど東北芸術工科大学ではたらいている。専門は、アナキズム。著書に『G8サミット体制とはなにか』（以文社）、『大杉栄伝』（夜光社）、『学生に貸金を』（新評論）、『はたらかないで、たらふく食べたい』（タバックス）、『現代暴力論』（角川新書）、『村に火をつけ、白痴になれ』（岩波書店）、『死してなお踊れ』（河出書房新社）。ビール、詩吟、河内音頭、長洲剛が好き。

【授賞理由】

すでにこの世にない人物にも、はるか遠くにいる人にも、われわれは言葉によって出会うことができる。いやむしろ、言葉としか出会うことができない。出会った言葉といかに向き合うかはその人の覚悟の度合いによるが、栗原康氏は誰よりも強く激しく言葉を抱き止め、その言葉の存在を新たな語り口に仕立て上げるという荒業を成し遂げた。大杉栄伝、伊藤野枝伝に見られる縦横無尽の語りは、対象となった「個人」の現実を超え、彼我の境を越え出て、誰のものでもない言葉の存在、思想の存在をまざまざと見せつけるとともに、氏でなくしてはなしえない力強い表現へと昇華させている。自己と他者のあわいにある言葉の際を自由に駆け巡り、氏はどこへ向かおうとするのか。なおいっそう遠くへと突き抜けられんことを期待し、当賞を贈ります。



©Taihei Ohara

金子薫

2018年 第11回受賞者

【略歴】

1990年、神奈川県生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科仏文学専攻修士課程終了。2014年「アルタッドに捧ぐ」で第51回文藝賞を受賞しデビュー。著書に『アルタッドに捧ぐ』『鳥打ちも夜更けには』『双子は驢馬に跨がって』がある。

【受賞理由】

なぜ、人は生きていかなければならないのか……金子薫氏の小説の中には、このような根源的な問いがあふれている。日常とは乖離した架空の場所や生き物をつくりだし物語を紡いでいるが、一貫しているのは、人が生きる営みや人生そのものへの問いだ。人生とは問いを重ねていくこと、そして、そこには言葉がある。金子氏の小説からは、フィクションに内在する言葉の力への信頼がひしひしと感じられる。文学には、もっともらしい教訓やわかりやすい答えなどは必要ない。読者も、作者さえも、自分自身の読む力で作品の世界を楽しみ、自由に感じたり考えたりすることそのものが文学なのだ。人が生まれて存在する理由が曖昧のように、すべては曖昧で夢かもしれないが、金子氏はそのことを言葉で表現し、言葉で世界を構築している。何よりも言葉を大切にしたいと願って創設された当賞を授賞するのに相応しい人であり、今後も日本文学の枠にとらわれない小説を生み続けることを期待して、賞を贈ります。

わたくし、つまりNobody賞

—— 受賞者一覧 ——



小佐野 弾

2019年 第12回受賞者

【略歴】

1983年、東京生まれ。1997年、慶應義塾中等部在学中に作歌を始める。2007年、慶應義塾大学経済学部卒業。大学院進学後に台湾にて起業。2017年、「無垢な日本で」で第60回短歌研究新人賞受賞。2018年、第一歌集『メタリック』刊行。2019年、中篇小説「車軸」が文芸誌「すばる」に掲載され、小説家デビュー。歌人集団「かばんの会」所属。

【授賞理由】

むらさきの性もてあます僕だから次は蝸牛として生まれたい
擁きあふときあなたから匂ひ立つ雌雄それぞれわたしのものだ
(第一歌集『メタリック』より)

赤であり青でもあると同時に、赤でもなく青でもない「むらさきの性」。この自己規定には与えられた属性への抵抗と、それを超える自由への切実な希求がある。小佐野氏の短歌には、男と女という二項対立を等身大のリアリティで超えるやわらかなセクシュアリティと、人を恋うる気持ちの普遍性があり、それを銜いなく描く健康な感性と、古典的でありながら新鮮な言語感覚に大きな魅力がある。短歌以外のジャンルにも積極的に挑戦しながら、既成の価値観を超えて「未だ言葉にされ得ないもの」に迫ろうとする小佐野氏の表現に期待し、当賞を贈ります。



伊藤 亜紗

2020年 第13回受賞者

【略歴】

1979年、東京生まれ。東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センター長(2月1日着任予定)。同リベラルアーツ研究教育院准教授。マサチューセッツ工科大学客員研究員(2019)。専門は美学、現代アート。元々生物学者を目指していたが、大学3年次より文転。東京大学大学院人文社会系研究科美学芸術学専門分野博士課程修了。文学博士。

主な著作に『ヴァレリーの芸術哲学、あるいは身体解剖』(水声社)、『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社)、『目の見えないアスリートの身体論』(潮出版社)、『どもる体』(医学書院)、『記憶する体』(春秋社)がある。趣味はテープ起こし。インタビュー時には気づかなかった声の肌理や感情の動きが伝わってきてゾクゾクします(談)。

【授賞理由】

「体」という「内なる他者」と、どう向き合うか。肥大する情報空間の中で身体性が希薄化していく現在、ますます重要度が高まる問いです。

伊藤亜紗氏が近年取り組んでいるのは、障害ゆえに自らの「体」と独自の関係を作り上げてきた人たちの「言葉」を手掛かりに、私たちが自明と思い込んでいる「自分」とは何か、「世界」とは何かを、根源から問い直す試みです。未知なる世界認識の可能性に向けて、真摯な探究心とやわらかく開かれた文章で迫る伊藤氏のさらなる展開に期待し、当賞を贈ります。

わたくし、つまりNobody賞

—— 受賞者一覧 ——



©Ryouko Shinzato

上間陽子

2021年 第14回受賞者

【略歴】

1979年、沖縄県生まれ。琉球大学教育学研究科教授。普天間基地の近くに住む。1990年代から2014年にかけて東京で、以降は沖縄で、未成年の少女たちの支援・調査に携わる。2016年夏、うるま市の元海兵隊員・軍属による殺人事件をきっかけに沖縄の性暴力について書くことを決め、翌年『裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち』（太田出版、2017年）を刊行。現在は沖縄で、若年出産をした女性の調査を続けている。2冊目の単著となる『海をあげる』（筑摩書房、2020年）では、沖縄での生活が政治によっていかに壊されているかを書いた。

【授賞理由】

上間陽子氏は、ひとの言葉を聞くことをとても大切にしています。暴力や貧困の中の若い女性たち、軍機の爆音の下で沈黙する人々の、聞かれることのない声にひたすら耳を傾ける。それを言葉にすることによって、こぼれ落ちるものを、記そうとしています。「自分の声が聞こえないと目がく日々」の中で、上間氏が書き始めた文章は、他者というはかりしれない存在をどう理解したらよいのかという、答えのない問いについて、私たちが切実な思索の世界に誘います。新しい言葉を紡ぎ出そうとする「聞く人」上間陽子氏に、当賞を贈ります。



荒井裕樹

2022年 第15回受賞者

【略歴】

1980年、東京都生まれ。専門は障害者文化論、日本近現代文学。東京大学大学院人文社会系研究科修了。博士（文学）。二松学舎大学文学部准教授。障害や病気とともに生きる人たちの自己表現活動をテーマに研究・執筆を続ける。著書に『隔離の文学 —— ハンセン病療養所の自己表現史』（書肆アルス）、『生きていく絵 —— アートが人を〈癒す〉とき』（亜紀書房）、『差別されてる自覚はあるか —— 横田弘と青い芝の会「行動綱領」』（現代書館）、『障害者差別を問いなおす』（筑摩書房）、『車椅子の横に立つ人 —— 障害から見つめる「生きにくさ」』（青土社）、『まとまらない言葉を生きる』（柏書房）などがある。

【授賞理由】

冷笑、中傷、揶揄、論破。あるいは、同調、追従、忖度、強弁。いずれも、人を追い詰め、黙らせる言葉ばかりです。そうしたいやな言葉が溢れる今日の分断社会にあって、沈黙を強いられた言葉、なかったことにされた出来事に目を向け、丁寧にすくい取ろうとするのが荒井氏の仕事です。それは声を上げること、言葉にすること、表現することの本来の意味をあらためて問いなおすことにほかなりません。人はなぜ言葉を使い、声を上げ、表現しようとするのか。やむにやまれず出る言葉は、華々しくもなければ力強くもないかもしれない。しかしそのたどたどしく言いよどむことの価値を、こうとしか言えないという切実さを捉えようとする氏の姿勢は、表現という行為のもつ力を確実に思い出させてくれます。今後もその誠実さで、言葉と表現への信頼を取り戻し、あらたな可能性を広げていかれることを期待し、当賞を贈ります。

わたくし、つまりNobody賞

—— 受賞者一覧 ——



町田樹

2023年 第16回受賞者

【略歴】

1990年、神奈川県生まれ。スポーツ科学研究者。振付家。スポーツ解説者。現在、國學院大学人間開発学部助教。2020年3月、博士（スポーツ科学 / 早稲田大学）を取得。専門は、スポーツ&アーツマネジメント、身体芸術論、スポーツ文化論、文化経済学。主な著書は、『アーティスティックスポーツ研究序説』（白水社、2020年／日本体育・スポーツ経営学会賞）、『若きアスリートへの手紙——〈競技する身体〉の哲学』（山と溪谷社、2022年）。主要論文として、「著作権法によるアーティスティック・スポーツの保護の可能性——振付を対象とした著作物性の画定をめぐる判断基準の検討」（2019年／日本知財学会優秀論文賞）がある。スポーツとアートの間にある身体運動や舞踊についての、学際的研究を専門とする。

かつてはフィギュアスケート競技者として活動し、2014年ソチ・オリンピック個人戦と団体戦ともに5位入賞、同年世界選手権大会で準優勝を収めた。2014年12月に競技引退後は早稲田大学大学院に進学し研究活動に励みながら、プロフェッショナルスケーターとしても自らが振り付けた作品を、アイスショーなどで発表。2018年10月にプロを完全引退したが、現在も研究活動のかたわら、振付家としても活動中である。なお、振付家としての成果は、作品映像集である『氷上の舞踊芸術——町田樹振付自演フィギュアスケート作品Prince Ice World 映像集2013-2018』（新書館、2021年）に収められている。

その他、スポーツ教養番組「町田樹のスポーツアカデミア」（J SPORTS、2020年～／2021年度衛星放送協会オリジナル番組アワード審査員長賞／2022年度衛星放送協会オリジナル番組アワード文化・教養番組部門最優秀賞）の企画制作者、および毎日新聞運動面連載（「今を生きる、今を書く」2020年～）コラムニストとして、「スポーツ実践者・研究者・社会」を結ぶ思想を、新たな言葉で届ける努力を続けている。

【授賞理由】

表現するとは、どういうことか。それを考え、考えたことを言葉や身体行為によって表現しようと試みる、この、謂わば終わりのない円環的な問いに魅入られてしまった氏は、文字どおり休みなく、無窮動なままに問い続けます。表現とは何か、そこに生じる美とは何かと。それが自身の業であることを自覚しつつ、表現という永劫の謎に對峙し執拗に問い続ける氏の姿勢こそ、表現者という存在がもつ野蛮で本質的な力を思い出させてくれます。今後、必ずや表現の新たな地平を拓いていかれることを期待し、ここに当賞を贈ります。



永井玲衣

2024年 第17回受賞者

【略歴】

1991年、東京都生まれ。学校、企業、寺社、美術館、自治体などで、人びとと考える場である「哲学対話」を行う。哲学エッセーの連載も。独立メディア「Choose Life Project」や、坂本龍一・Gotch主催のムーブメント「D2021」などでも活動。著書に『水中の哲学者たち』（晶文社、2021年）など。詩と植物園と念入りな散歩が好き。

【授賞理由】

永井氏は、仲間を集めてアゴラを作りたいのではないかとそれは、無知の知をわかった上で、問いたい、知りたいことが、いつもあふれているからなのだろうが、更に、人の問いも知りたいのであろう。結果として、その多くの問いに明確な答えは出ず、問いは問いを呼び、更なる深み（水中）にはまるばかりなのだが、それをヨシとする姿勢は凛々しい。出ない答えを求めてもがくその姿を、あえて人々（読者、子ども）に見せる人だからこそその信頼感もある。哲学者の役目は、自分で考えるだけでなく、人に考えさせることでもあったのだから、その実践は、正しい。これからも、どんどんいろんなことにぶつかって欲しいとの期待を込めて当賞を贈ります。

わたくし、つまりNobody賞

—— 受賞者一覧 ——



奈倉有里

2025年 第18回受賞者

【略歴】

1982年、東京都生まれ。ロシア文学研究者。ロシア国立ゴーリキー文学大学卒業。著書に『夕暮れに夜明けの歌を 文学を探しにロシアに行く』（イースト・プレス）『文化の脱走兵』（講談社）『ロシア文学の教室』（文藝春秋）『ことばの白地図を歩く 翻訳と魔法のあいだ』（創元社）『アレクサンドル・ブローク 詩学と生涯』（未知谷）など。訳書にサーシャ・フィリペンコ『赤い十字』『理不尽ゲーム』（集英社）、リュドミラ・ウリツカヤ『陽気なお葬式』（新潮社）、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ『亜鉛の少年たち』（岩波書店）など。

【授賞理由】

分断なる言葉は一体いつ登場したのだろう。一体いつから、国家指導者が平然と嘘をつき、分断を煽るようになったのだろう。誹謗中傷なる言葉を、一体いつからこれほど目にするようになったのか――。

このような状況にあっても、奈倉有里氏は言葉への信頼をあきらめません。言葉は人と人を、人と社会をつなぐことができるというその強い信念は、どの著書からも熱く感じ取ることができます。それは、文学作品にじっと耳を傾け、その言葉の力をあますところなく汲み尽くし、希望の光を見出そうとする決意の表れです。

平和とも安定とも、正気ともほど遠い現下の世界に対し、言葉と文学への信頼だけを携えて抗い続ける氏の勇敢さを心から讃えたい。そして、私たちをつなぐちいさな言葉を紡ぎ続ける氏の表現活動のさらなる拡がりと展開を期待し、当賞を贈ります。